

第5章

2017 シンポジウム抄録

シンポジウム 2017 開催レポート

「障害者スポーツのテレビ放送における社会発信の変化」



11月23日（木・祝）、東京・弘済会館にてYMFSシンポジウム2017「障害者スポーツのテレビ放送における社会発信の変化」を開催しました。

『障害者スポーツを取巻く社会的環境課題』をテーマとしたYMFSシンポジウムは、平成26年度より毎年開催し、今回で5回目となります。今回はメディア露出の拡大により障害者スポーツの社会的関心の高まりを感じる中、特に社会的影響度の高いテレビ放送環境の変化を踏まえ、障害者スポーツ放送のあり方や今後の期待などについて来場者の皆さんとともに考える機会としました。

当日は当財団障害者スポーツ・プロジェクトを代表して小淵和也さん（公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主任研究員）が平成28年度調査研究結果について基調報告。また、同プロジェクトリーダーの藤田紀昭さん（日本福祉大学スポーツ科学部 教授）をコーディネーターに、パネルディスカッション「障害者スポーツとテ

レベ放送の関係性」を実施しました。

パネリストにはテレビ放送メディアの立場からWOWOWで放送中のパラリンピック・ドキュメンタリーシリーズ WHO I AM のチーフプロデューサー太田慎也さんと、これまで様々なスポーツ国際大会などの中継経験が豊富なNHK解説主幹（スポーツ担当）の刈谷富士雄さんが登壇されました。また障害者アスリートの立場から陸上競技の佐藤圭太選手とウィルチェアーラグビーの若山英史選手が登壇されました。パネルディスカッションでは非常に活発なクロストークの他、シンポジウム参加者との質疑応答なども行われました。当財団障害者スポーツ・プロジェクトアドバイザーで当日はオブザーバーとして参加した中森邦男さん（公益財団法人日本障がい者スポーツ協会 部長、日本パラリンピック委員会 事務局長）は、「長年障害者スポーツに携わってきて、社会の関心という点で様々な難しさを感じ続けてきた。しかし、今日の素晴らしいディスカッションを聞いて目からウロコが落ちた気持ち。発想の転換をすることで道が拓けるという可能性を感じる事ができた。お集まりの皆さんに感謝したい」と述べました。



※以下で動画レポート、パネリスト特別インタビューを公開しています。

<http://www.ymfs.jp/project/culture/survey/symposium/20171123/#report>

<平成 28 年度調査結果および課題報告>

小淵 和也さん（公益財団法人笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 主任研究員）



【調査の概要】パラリンピックのテレビメディアでの露出状況を把握するため、リオを含む過去 3 大会の「障害者スポーツのテレビ放送における社会発信の変化」について研究しました。

【分析結果からわかったこと】

過去 3 大会の放送実績の分析結果から北京、ロンドン、リオと放送時間が増えているのがわかりました。例えば NHK 総合がロンドンからリオでは 3 倍以上へと拡大しているのに対し、NHK 教育（E テレ）では半減しています。これは、NHK がロンドン大会ではパラリンピックを障害福祉と捉えていたのに対し、リオ大会ではスポーツとして捉えなおしたものによるものと推測されます。また、番組カテゴリー別にみると「情報／ワイドショー」「ニュース／報道」が大きく伸びているのに対し、「スポーツ」番組ではロンドンとリオで変わりはありません。このことからパラリンピックやパラリンピアンが、様々な角度で伝えられていることがわかります。

【パラリンピアンの認知度について】

テレビでの情報露出が大幅に増えている一方で、パラリンピアンの認知度は高まっていません。パラリンピアンの認知度調査も行ったのですが、車いすテニスの国枝慎吾選手が最もよく知られていて 34.0%。リオ大会でメダルを獲得した陸上競技の辻沙絵選手は 5 番目で、わずか 6.1%です。国枝選手でさえ 3 分の 2 の人々が知らないのが日本の現状なのです。

<パネルディスカッション>

佐藤 圭太さん（陸上競技選手 リオ 2016 パラリンピック日本代表／世界パラ陸上
ロンドン 2017 日本代表）

『障害に“なじむ” 社会実現の契機となってほしい』



【現状について】私は小・中学校で年間 20～30 回ほど講演をさせてもらっています。その際、生徒の皆さんに「義足を使っている人を実際に見たことがあるか？」と質問するのですが、手を挙げるのはだいたい 1 割程度。でも「テレビで見たという人は？」と聞くと、「はい」とほぼ全員が

手を挙げます。「パラリンピックの放送を見た」という子もいれば、「24 時間テレビで登山する人を見た」という子もいます。いずれにしても子どもたちはテレビを通じて、義足そのものや、義足を使っている人を認知しています。

一方で、私の義足を見た子どもたちの反応は、「うわー」と声を出して、驚いたような、怖がっていてもいるような印象です。大人たちは少し違うのですが、「助けなきゃ」とか「かわいそう」とか、そんなふうに感じるようです。

【今後に向けて】

私が願っているのは、「見たことがある」「知っている」からもう一歩進んだところにある、障害に「なじむ」という社会。そういうふうに社会の人々の心がマインドセットされるために、私たち選手は競技力を向上することでより強く発信しなければと考えています。

【東京 2020 大会への抱負】

私の実感としては、東京 2020 大会が決まってから、テレビで「パラリンピック」という言葉をよく聞くようになりました。特にリオ大会以降、メディアの皆さんが、パラリンピックやパラ選手を盛り上げていこう！と意識してくださっているのを実感しています。私自身もパラ選手を扱う特別番組などに何度か出させていただきました。東

京 2020 大会でメダルを獲っておしまいではなく、そうした「なじむ」社会の契機にしていけたらと考えています。

若山 英史さん(ウィルチェアーラグビー選手 リオ 2016 パラリンピック日本代表)

『チームを支える存在の“いぶし銀の魅力”も伝えてほしい』



【現状について】おかげさまでウィルチェアーラグビーという競技について、テレビや雑誌で取り上げてもらうことが多くなりました。競技自体の認知は高まっていると感じています。一方で報道する皆さん、会場やテレビで競技を観る皆さんにより理解を深めていただきたいという思いを持っています。

【ウィルチェアーラグビーの魅力とは？】

ウィルチェアーラグビーは、軽度の障害から重度の障害までポイントでクラス分けされたチームスポーツです。私は重い方から 2 番目のポイントで、チームの中ではローポインターという立場です。一方、軽度のハイポインターはボールを長く持ち、ゲームの中でも非常に目立つ存在です。ですからマスコミの皆さんの視線もそちらに向きがちなのですが、あくまでチームで戦う球技ですから、誰か一人の力で勝つことはできません。ローポインターは、ハイポインターにゴールまでボールを運ばせるため、道をつくり、盾にもなります。そうしたいぶし銀の働きなど、チームがどのように成り立っているのか、そのあたりを視聴者の皆さんに伝えていただきたいと願っています。

【今後に向けて】

非常に激しいスポーツですから、観た人は心の中にある何かを覆させられると思います。そうしたインパクトだけではなく、我々ローポインターが相手のハイポインターを技術や経験で止める見どころをしっかりと伝えていただき、また見ていただけたら嬉しいです。

太田 慎也さん (WOWOW チーフプロデューサー WHO I AM 製作)

『世界最高峰の選手と向き合うように、自分自身にも向き合ってほしい』



【現状について】2年前から世界中のパラアスリートを追いかけて、「WHO I AM」というドキュメンタリー番組を作っています。5年間にわたって、毎年8人のパラアスリートに密着するIPCとの共同プロジェクトです。WOWOWのような有料放送がなぜそのような取り組みをするのか、皆さんも不思議に思うかもしれません。

今、世界はグローバル化に向かい、コミュニケーションのツールも発達して、さらに日本では東日本大震災を契機に「絆」や「つながり」が大切にされるようになりました。その反面「個」が失われつつあるように感じています。「自分について語るか」「これが自分だ！という主張はあるか」。世界のパラアスリートは、競技だけでなく、人生についても自信に満ち溢れています。メディアとして世界最高峰の選手たちと向き合うとともに、視聴者には自分と向き合ってほしい。そういう思いを込めてタイトルを「WHO I AM」としました。私たちはこの志を忘れないよう、「フィロソフィー」として文章にまとめて、ことあるごとにそれを読み返しています。

【今後に向けて】

私たちは有料放送の小さな局ですが、パラアスリートたちが情熱を持ち、人生をエンジョイしている姿を伝えながら、2020年、そしてその先に向けて貢献したいと考えています。海外のパラアスリートは、皆口をそろえて「東京はアメージングな大会になる」と期待しています。ハードだけでなく、ソフトもますます充実して、選手たちがエンジョイできる大会となるよう願っています。

刈屋 富士雄さん（NHK 解説主幹（スポーツ担当）／リオ五輪ニュース情報番組 解説委員）

『何がわからないのかをまず知るところから始めた』



【現状について】私は 33 年間、スポーツの現場に立ってきましたが、パラリンピックの中継経験が一度もありません。NHK では長いこと、パラリンピックは生活情報系、福祉系の分野に位置付けられてきました。北京パラリンピックが E テレ（NHK 教育）で中継されたのもそのためです。

北京大会の後「本当にそういう姿勢で良いのか？」という議論が沸き起こり、ロンドン大会では初めてアナウンサーが現地から実況しました。続いて 2015 年には NHK の中にパラリンピック研究会ができ、頻繁に研修・研究を行うようになりました。その最初のテーマは「何がわからないのか、まずそれを知ろう」というものでした。わからないことがわからない、そんなレベルだったのです。それでは、今はわかっているのかと聞かれると、その逆です。「何を伝えるべきか？」「どう伝えるべきか？」、ますます悩みは深まるばかりです。

【東京 2020 大会へ向けて】

体制は徐々に大きくなってきて、リオ大会では 13 人のアナウンサーが現地から伝えました。東京のスタジオから伝えたアナウンサーを含めると 22 人の体制です。さらに 2020 東京大会に向けて、その倍以上のアナウンサーの育成を目指しています。

コーディネーター

藤田 紀昭さん（日本福祉大学スポーツ科学部 教授）



佐藤選手からは「マインドセットをつくれるのは我々選手だ!」という力強い言葉、若山選手からは「いぶし銀への視点」というメディアへの要望、太田さんからは「パラアスリートの姿を通じて自分について考えてほしい」というメッセージ、そして刈谷さんからは「伝える方も悩んでいる」という現場

の実態など、たいへん興味深い話をさせていただきました。2020年、そしてその先に向かって、非常に有効なディスカッションになったと実感しています。